

教育関係へのシステム理論的アプローチの検討

教育学コース 木 村 浩 則

Study of the Systemtheoretical Approach to Educational Relations

Hironori KIMURA

When we try to solve the serious problems of modern education, such as school refusal and bullying, we can not attribute the problem to individual teacher or student, but we need to grasp the relation or system in education, and construct the theoretical frame that enables us an effective approach. In this paper, we follow the development of systemtheory in the family therapy, and then we will inquire into the possibility of systemtheory's application to the various relations in education. On that occasion, it may be a matter whether the systemtheory is an external control theory or not.

目 次

はじめに

- 1 「学校臨床」におけるシステムへの着目
- 2 家族療法におけるシステム理論の展開
- 3 システム理論と教育—第三世代のシステム理論へ
むすびにかえて

はじめに

学校というものが、教師と生徒、あるいは生徒と生徒といった諸関係から成り立つ総体であるとするならば、今日の学校に見られる諸関係の様相は、もはや調和的、牧歌的なものとは言えないであろう。いじめや不登校問題の深刻化はそのことを如実に物語っている。その「関係」が生み出すものは、まさに「病理」と呼ぶほかはないのである。では今日の教育が、教師と生徒の調和的關係モデルに依拠できないとしたら、あるいは教師の個人的な努力にのみ問題の解決を期待できないとしたら、われわれはどのように教育現実をとらえ、それにアプローチすればよいのだろうか。そこでわれわれが注目したいのが、システム理論的アプローチと呼ばれるものである。それは、問題の原因や背景を個々の生徒や家庭に求めたり、あるいはその解決を個々の教師の情熱や愛、努力にのみ期待するのではなく、むしろ問題背景の主体、解決の主体を、教師個人ではなく、学級あるいは学校という関係性、すなわちシステム自体に求めようとするもので

ある。ではそもそもシステム理論とは何か、その原理と展開を教育とのかかわりにおいて検討することが本論の課題である。そしてそこから教育における関係性あるいはシステム自体を把握し、それに有効に働きかけるための理論枠組みの構築をめざしたい。

1 「学校臨床」におけるシステムへの着目

最初に近藤邦夫の『教師と子どもの関係づくり』(1994)における議論をとりあげることにした。この著作の第5章、第1節の副題が「個人から関係へ、そしてシステムへ」となっていることから明らかなように、この論文の中では、われわれと同様の関心がとりわけ心理臨床理論のパラダイムの変遷という観点から取り上げられている。ではその心理臨床理論におけるパラダイム転換とは何か。近藤によれば、現代の新しい心理療法は、フロイト理論をその第一世代、来談者中心療法、行動療法、実存分析などを第二世代とすれば、それらに代わる第三世代のアプローチと位置づけられる。まず第一、第二世代の伝統的心理療法は、個人体系モデルと患者の内的な心理的現実を重視する理論にしたがって、患者の外部社会体系に位置することによって、また「現実の場」から隔離された「治療の場」を設定し、患者との接触を治療の場だけに限定することによって行なわれ、さらに治療の介入は問題発生の後を追って、しかも問題が顕在化し重篤化してから、患者または周囲の人間の来談を待つて開始されるものである。しかしこうした伝統的心理療

法は一応の社会的主体性を持ち、ある程度の自己表現と自己洞察の能力を備えた成人の神経症者を対象とするものであり、社会的主体性に乏しく、自己表現や自己洞察の能力にも限界があり、治療者との協力関係が難しい患者、すなわち子どもや分裂病者などの治療にあたる場合には不適切である。

そこで個人的治療の場における新たな試みが登場する。それは第一に治療者が自ら患者へと接近していく試みであり、第二に患者－治療者関係を職業的なものからより親密な人間的なものに変えていくとする試みであり、第三に「種々の心理的障害は対人関係の障害であり、それは治療者との現実の対人関係を通して癒される」といういわば「関係」の視点の導入である。¹⁾とりわけ「関係」の視点は、心因性の発見が、医学モデルから脱却した新たな心理学モデルの形成の第一の契機だったとすれば、第二の契機として位置づけることができる。その特徴を近藤は次の4点にまとめる。①個人の行動は個人と環境の相互作用の結果である。②パーソナリティは、環境への反応様式であり、その原型は発達初期の、個人と「重要な他者」との対人的交渉様式に求めることができる。③種々の心理的障害は、個人のなかの自己体系の障害ではなく、自己－他者体系ともいべきものの障害、あるいは対人関係の障害と理解することができる。④心理療法における変化は、治療者の専門的介入によって患者の自己体系内に生ずるのではなく、患者が過去に経験してきた対人関係とは異なる新しい対人関係を治療者との間で現実を経験し、それによって患者の自己－他者体系が変化することにある。²⁾

ここでの近藤の「関係」についての議論を補足するために、フロイト以後の関係論について触れておきたい。フロイトにおいて「対象」とはあくまで「欲望の対象」、つまり欲望を充足するものを指し、それは客観的对象とは区別されるものである。よって対象は近藤の言う「個人内的なもの」にすぎないということになる。そのような独我論を批判し、「個人間的なもの」に焦点をあてたのが、フェアバーンなどの「対象関係論」である。ただ注意すべきことはフロイトの場合、主体と言えるのはあくまで欲望であって、自我もまた欲望をコントロールする機能あるいはシステムにすぎないということである。それはガントリップの概念³⁾を借りれば、主観的意識としての「パーソン自我」ではなく、「システム自我」と呼ぶべきものである。その意味で、対象関係論における「対象」の成立は、自我「主体」の成立と相関関係をなす。自我の主体として個人性を認めることによって始めてその対称概念としての「対象」も独自の存在性を認

められるのである。よって近藤が、フロイト的なアプローチから関係論的なアプローチへの転換を「個人内的(intra-personal)な視点から個人間的(inter-personal)な視点への」⁴⁾変換と表現することは不十分であるように思われる。なぜなら主体としての個人という視点自体のないことがフロイトに対する対象関係論からの批判だからである。しかも小此木啓吾の「対象関係論」という場合の対象(object)とは、何よりもまず、その対象が客観的にどのように存在するかよりも、幻想の中で主観にとってどのように表象され、認知されるかが、その出発点である。⁵⁾(ここではフェアバーン、ガントリップ、ウィニコットら英国対象関係論が想定されている)という指摘を考慮するなら、英国対象関係論もまた「個人内的」視点にとどまる。「患者のかかえる問題のすべてを患者個人の内的要因に収斂せしめ」ようになった背景として近藤がとりあげる「『神経症の症状は患者の現実経験から発するのではなく、患者の内的主観的な願望にもとづく空想から発するものであり、客観的な現実よりも心的な現実(psychological reality)が大きな意味をもつ』というフロイトの重要な発見⁶⁾は対象関係論によって否定されたわけではない。むしろ明らかな外的対象の想定は、アメリカのネオフロイト派の「対人関係論」(サリバン)にみることができる。そしてそのようなアメリカにおける対人関係論の展開が家族療法理論につながっていくのである。⁷⁾

再び近藤の議論にもどろう。こうした関係的視点の登場は、治療方法にも変化を及ぼすようになる。「介入の対象が、患者個人から、患者の重要な他者(significant others)との関係に、そして患者が所属する社会体系へと変化・拡大していく」⁸⁾のである。そこでたとえば親と子の現実の関係を治療的介入の対象とする新たな視点が登場する。だが「1940年代中頃までは『関係』への治療的接近といっても個人治療の域を出ない」⁹⁾ものであった。『関係』という新たな標的に相応しい技法を生み出したのは、集団心理療法や心理劇の発展であり、1950年代後半に登場する「家族療法」である。「家族療法」においては、病んでいるのは患者「個人」でも、家族内の二者「関係」でもなく、患者の家族「システム」全体である。それゆえ「患者」は、家族システムの病理のあらわれ、またはその犠牲者であり、患者が変化するためには、患者の属する家族システムそのものが変化しなければならないと考えるのである。この「関係」から「システム」への転換こそ、近藤の言う第三世代の心理療法に属するものである。そして新しい心理療法の動向として近藤は①患者の所属するシステムへの介入に加えて、さらに②

治療専門家以外の治療資源の拡大, ③治療室でなく, 患者の属する場における非専門家による介入, ④予防的観点の導入をあげる。¹⁰⁾そしてこうした動向にこそ「学校臨床心理学」成立の基盤を見ることができると考えるのである。

そこで近藤の言う「学校臨床心理学」の担うべき課題は次のようになる。

- ①「子どもの問題」の発生を, 子どもと教師との関係, 子どもと学級や学校との関係, あるいは学級や学校のシステムそのものと深く関連する過程として理解し解明する。
- ②子どもの回復や成長を, 子どもと教師との関係, 子どもと学級や学校との関係, あるいは学級や学校のシステムそのものと深く関連する過程として理解し解明する。
- ③子どもの回復や成長に対する学校や教師の有効な介入方略を明らかにする。
- ④そのような学校や教師の有効な介入を促進するための援助方略を明らかにする。¹¹⁾

では近藤は実践的にはどのような方略を想定しているのだろうか。それは不登校問題すなわち子どもの不適応について, 「不適応児」という言葉に現れているような問題の個人帰属的なとらえかたをやめ, 教師あるいは学級システムと子どもとの「ミスマッチ」としてとらえようとする試みに見ることができる。それは「子供の情緒的問題を(内的葛藤や不適切な社会的学習の結果として)子供個人のなかに生じたものと捉えるのではなく, 子供と子供が所属する社会体系との間の『不適合』のあらわれとして, つまり子供がもつ行動様式と子供が所属する社会体系が要求し期待するそれとの間の『不調和』や『不一致』のあらわれとして捉える」¹²⁾というものである。具体的には, そのクラスを担当する教師に子どもとの間にどのような「ミスマッチ」が生じているかを調査し, そのデータを示すことによって教師の「気づき」を促すという方略が取られる。

しかしこの方略は結局, 原因の生徒帰属が教師帰属に転換されただけにすぎないように思われる。また教師に対しては学級経営に対するさらなるプレッシャーを与えることにもなりかねないという問題もはらんでいる。¹³⁾しかもこのミスマッチという視点は, いまだシステム論的な観点に立ったものとは言い難い。近藤も認めるように「一人の個人があるシステムの中でかかえる困難を明確化する手掛かりとはなっても, その発想は基本的に個人と体系という二者関係に焦点を合わせた視点であり, 三者以上の人間で構成される集団やシステムの構造そのものを捉える視点ではない」¹⁴⁾のである。さらに指摘す

るなら, 「適合(マッチ)」、「不適合(ミスマッチ)」という視点は, 同調志向的発想であり, 「逸脱」や「差異」の積極的役割を考慮していない。彼の「システム」観は, いまだ「二者関係」の域を出るものではなく, 逸脱増幅的なシステム¹⁵⁾のダイナミックな側面が視野に入れられていない。彼自身も認めるように「問題の理解や介入方略の中にようやく親子関係や家族システムを組み込める段階にたどりついたわれわれにとって, このうえさらに, 教師や学校という新たな人物とシステムを組み込んで子どもの問題を理解する枠組みをつくり, それにもとづいて教師や学校システムへの有効な介入方略を提起することはなまやさしいことではない」¹⁶⁾のである。ではわれわれはそのような困難をいかにしてのり越えることができるのだろうか。それには, 近藤の研究において十分に扱われることのなかった家族療法におけるシステム理論の展開を視野に入れる必要がある。

2 家族療法におけるシステム理論の展開

近藤は「個人から関係へ, そしてシステムへ」の転換の契機を, 主にこれまでの治療方法の行き詰まり, 子供や重度精神障害への治療対象の変化, 拡大といった実践的要請に見ていた。しかし今日の家族療法家たちは, 家族療法を「単なる新種の治療技法という以上のものであり, 人間の行動と対人相互作用についての影響力の大きな新仮説に基づいている」¹⁷⁾と考えている。リン・ホフマン(Lynn Hoffman)によれば, その知見は心理学内部からではなく, 1950年代のベルタランフィ(Ludwig von Bertalanffy)による一般システム理論¹⁸⁾という外部からもたらされたのである。さらに家族療法に影響を与えた人物として, 情報理論家のC.シャノン(Claud E. Shannon), サイバネティストのN.ウィナー(Norbert Wiener), そしてグレゴリー・ベイトソン(Gregory Bateson)などが上げられる。そこでホフマンの著作『システムと進化』(Foundations of Family Therapy, 1981)に主に依拠しながらシステム理論の原理とその展開を見ていくことにしたい。

家族療法家はベルタランフィ, ベイトソンらのシステム概念によって「独立した対象であるクライアントあるいは家族に働きかける, 独立した行為者としての治療者」¹⁹⁾という旧式となった概念を捨て去る。そして新たな認識論に基づいた治療理論を確立する。その新たな認識論の中心概念はまず「円環性」あるいは「循環性」として特徴づけられる。従来の精神医学は, 一般医学と同様に「個人を機能異常の所在地としており, 病因は個人

の遺伝子や生化学,あるいは精神内的発達の不完全性に帰着される」²⁰⁾という直線的,因果論的な思考法に依拠していた。しかし家族療法家らの観察は「居合わせた全員のコミュニケーションと行動を見ると,行きつ戻りつする円環的な因果関係の輪をいくつも構成しており,病者の行動はより大きな回帰的ダンスの一部にすぎないこと」²¹⁾を洞察するのである。それは例えば次のような単純な事例からも読み取れる。

「子どもは、『両親は僕をちっとも家から出してくれない』と言い、『私達はそうしようとしたのに,この子がいつも迷子になってしまうんです』と,両親は言った。そこで,その環はいつまでも回り続ける」²²⁾

このとき因果論的な思考では,問題の原因をわがままな子どもあるいは過保護な親に帰属させることになる。だがこの悪循環を読み取れば,治療目標は問題を含んだ循環に陥ったシステムのどこか一部に介入し,そのシステムをその悪循環から脱出させ,問題を含まないシステムに移行するのを促すということになるのである。

またホフマンは家族療法には旧と新の二つの異なる世代が存在すると言う。その変化は明らかにシステム理論自体のパラダイム転換に相関する。第一世代の理論家,たとえばカリフォルニア州のパロ・アルトにあるMRI (Mental Research Institute) の精神科医ドン・ジャクソン (D.D.Jackson) などは家族の平衡維持機能を強調する。それに対してテキサス大学の心理学者ポール・デル (P.Dell) は家族を平衡維持的モデルではなく進化的モデルによってとらえようとする。まず第一世代の理論は,1950年代に登場するベルタランフィらの「開放系動的平衡システム」という考え方に基づく。これはそもそも19世紀の生理学者ウイルヒョウ,デュボア=レイモンに始まる物質代謝する有機体をモデルとした概念であるが,それは外界とも物質代謝を行い,環境との相互作用を通じて自己形成することによって平衡状態を維持する。またサイバネティクスの用語を用いれば「逸脱・対抗プロセス」と呼ぶことができる。たとえば「調整器」と呼ばれ制御ユニットのついた,蒸気エンジンを考えてみる。調整器はエンジンの最適回転数を念頭に置いてセットされている。回転数が最適状態より少なくなると,アーマチュアの動きが遅くなり,それによって燃料の供給は増し,回転数が平常にもどる。逆に回転数が多くなり過ぎると,アーマチュアの動きが増し,それによってブレーキが作動し,システム全体はふたたび正常にもどるのである。そこで家族療法家のジャクソンは「家族ホメオスタシス (恒常性, 平衡性)」という用語を用い,またヘイリーは家族を「調整器」のついた自動制御装置にたと

えた。

しかし1963年,社会学者のマゴロウ・マルヤマは論文「セカンド・サイバネティクス」²³⁾を著し,こうした形態維持に重点をおくシステム理論に異議を唱えた。彼はシステムには形態維持のプロセス (ファースト・サイバネティクス) と同時に形態発生的プロセス (セカンド・サイバネティクス) があることを明らかにした。それは「逸脱・増幅のプロセス」とも呼ばれ,偶然の些細な始動が正のフィードバックを通じて累積的に増幅され,初期条件とはかけはなれた複雑さを獲得し分化,発展していくことを意味する。そしてマルヤマは例えば先進国と途上国の経済格差が拡大していく原因,あるいは生物進化や個体発生といった現象の仕組みをこの理論によって明らかにしようとする。この議論に家族療法家たちも注目した。しかしそれは逸脱・増幅プロセスそのものではなく,むしろ「たがいに釣り合いをとっている正および負の相互因果ループが共存しう」²⁵⁾という点である。ホフマン自身も「どんなフィードバックでも逸脱・増幅効果と逸脱・対抗効果を同時に有することをまず理解してお」²⁶⁾くべきだと言う。つまり「互いに寄りかかり,あるいは引っ張り合う多くのシステムの複合的效果が,生態系で見られるような一種の安定性につながるかもしれない」²⁷⁾と考えるのである。例えばサイバネティクス心理学の十島雍蔵も「システムにはたいてい正のB (フィード・バック) の行き過ぎを負のBで巻き戻す安全弁が組み込まれている」²⁸⁾ (カッコ内は筆者) と言う。例えば核家族内の不均衡が拡大親族内の不均衡を修正する役割を担っているのであり,また子どもの問題行動が夫婦の不仲のエスカレーションを押さえる役割を担っているのである。

ただしマルヤマの理論は彼の本来からすれば,けっしてそうした安定化に重きをおいていたわけではない。むしろ進化や変動を積極的に位置付けるために持ち出された理論なのである。後にマルヤマ自身も自分の理論が第一サイバネティクスの単なる拡張に位置付けられてしまったことを「憤慨ではなく,諦めと孤独」をもって語っている。²⁹⁾マルヤマは自分の理論の中心的観念は「(1)システムにおける異質性の役割, (2)異質的な要素間の互恵的で全体を利する相互作用, (3)異質性の一層の増加とその結果としての新しいパターンの発展である」³⁰⁾と言う。つまり第一サイバネティクスの「安定化」に対立する「異質性増大」がマルヤマ理論の核心だったのである。

にもかかわらず家族療法家たちは,マルヤマの理論を平衡維持的なシステム理論の中に組み入れてしまった。あくまで彼らは家族を平衡維持システムとして見るこ

にこだわったのである。それは異常なものの正常化あるいは不安定なものの安定化という一般医学の観念を家族療法もまた前提していることの現れである。しかもこれは治療者の前提であるとともに患者あるいはクライアントの前提でもある。そもそもクライアントは自分を正常ではないと自覚しその安定化を求めるのでなければ、治療者を訪ねたりはしないからである。またそこには家庭とは調和的、安定的な場であるという中産階級的核家族イメージが前提されている。例えばそれは構造派³¹⁾のミニューチン(Salvador Minuchin)が「良く機能している家族モデル」というものを仮定して、治療目標を「この規範モデルにできるだけ接近するように家族を再組織化すること」³²⁾におくことにもあらわれている。

しかし「ホメオスタシスと均衡を重視する立場から、家族集団を『システム』になぞらえる」³³⁾、このモデルには問題点もあるように思われる。ホメオスタシス(homeo-stasis)という言葉にもあらわれているように、それは安定志向的、秩序志向的である。その意味で家族ホメオスタシスのモデルは家族とは安定的であるべきであり、そうでなければそれは問題家族であるという固定的な先入観にもつながる。³⁴⁾家族療法が従来の近代的な医学モデルからの脱却をめざしていたにもかかわらず、またそれゆえにI P (identified patient=患者とみなされる人)という造語まで生み出したにもかかわらず、家族を患者として絶対化してしまい、その不安定な家族を安定化させることが治療だという従来の医学的発想に結局はとどまっているように思われる。それは、フーコーが指摘するように近代の精神医学が「狂人」を作り出して来た³⁵⁾のと同様に、家族療法家が問題家族を作り出していくということにもなりかねないのである。

ホメオスタシスに依拠する家族療法に対する批判は、以後、家族療法家内部からも生じた。それをホフマンは「第二世代の家族療法」と呼ぶ。それは、システム理論の新たなパラダイム転換、1970年代に物理学、化学、数学などの分野で起こった熱力学の第二法則（自然の変化はエントロピーが増大する方向、つまりその系の秩序が乱れる方向に進む）への批判、とりわけイリヤ・プリコジヌ(Ilya Prigogine)の「散逸構造論」³⁶⁾に触発されたものである。プリコジヌによれば、多くの物理的・科学的過程は第二法則からはずれ、生物にはほとんど適用できない。生物はむしろ負のエントロピーの方向に運動し、混沌から新たな秩序を形成していくのである。例えば「結晶は溶液中から突如析出し、環境条件に対応して形態を変化させながら成長を続ける。また発生胚は未分化な全体から分節を繰り返し、部分の成立と同時に部

分間の関係が成立する。生成を通じてそれ自体で秩序の形成を行い、一定の環境条件下で『自己』そのものを形成する」³⁷⁾というわけである。この新世代の代表的理論家が先に紹介したポール・デルであり、そしてホフマン自身もその世代の一人である。

デルは言う。「システムはその時点の周辺で特定のゆらぎをとめないながら機能する。この特定の機能の仕方には、安定性の幅があって、ゆらぎは押さえ込まれ、システムは大して変化しない。しかしゆらぎが増幅されるべきではないだろうか。ゆらぎがそれまでの安定性の範囲を越え、システム全体の機能を新しい力動的範囲の中へ導くかもしれないではないか。そのような不安定性を獲得するためには、自己触媒的な歩み、あるいは正のフィードバックへの高まりが必要とされる」³⁸⁾つまりデルにとって問題をかかえた家族とはゆらぎの押さえ込まれた家族である。よって治療の課題は家族に負のフィードバックがかかるのを阻止して、ゆらぎを増幅させることである。それによって家族は新たな秩序を自ら形成していくのである。

3 システム理論と教育—第三世代のシステム理論へ

このようなシステムの自己組織化あるいは進化という考え方においてはじめて、われわれは教育学とシステム理論をつなぐ可能性を見いだすことができる。なぜなら第一世代のシステム理論の安定志向的性格は、秩序志向的な教育関係、つまり子どもを管理や操作の対象としてのみとらえる発想につながる可能性があり、その点で治療の場合以上に問題をはらんでいるからである。そう考えると近藤邦夫のシステム志向も微妙な問題をはらむことになる。治療と教育の境界にある学校臨床をシステム理論によってつなぐ試みは、治療＝安定化という第一世代の発想に立てば、学校、学級の管理、秩序化の手段ともなりうるからである。それは最近の「教育臨床」ブームがはらむ問題性、すなわち「臨床」と「教育」の結合がはらむ問題性とも軌を一にする。しかし第二世代のシステム理論の立場は治療をむしろ教育の側に近づける。第二世代における家族の自己組織化とは家族の発達であり、成長である。同様に教育においてそれは、学級集団あるいは子どもを安定化すべきシステムではなく、自己組織化するシステムとしてとらえることを可能にするのである。

ところがこの第二世代のシステム理論にも問題がないわけではない。それは第二世代が第一世代と同様にシス

テムを「開放系」としてとらえている点である。有機体モデルから生まれた第一世代システム論は、システムを、外部とエネルギー代謝や物質代謝を行う「開放系」としてとらえる。そして第二世代の場合も、自己組織化がエントロピー増大の法則に対抗するためには、負のエントロピーを外部から取り込むこと、あるいは外部にエントロピーを放出することが必要であることから、やはりシステムを「開放系」としてとらえる。だが河本英夫の指摘によれば、それは「エントロピー増大の法則に逆行する現象の成立要因を外部に求めることであり、秩序化の可能性は外部に委ねられてしまう」³⁹⁾ことになる。つまり第二世代のシステム理論においても、秩序化の原因は外部に求められており、その意味で外部による「制御」の理論となる可能性をはらんでいるのである。しかしそれに対してシステムの「閉鎖性」を強調する理論が次に登場する。それがいわゆる「第三世代のシステム理論」である。そこでシステム理論は「制御という視点からオートノミーの本質へと移行」⁴⁰⁾するのである。

1973年、神経生理学のフンベルト・マトゥラーナ(H.R.Maturana)とフランシスコ・ヴァレラ(F.J.Varela)は共著「オートポイエーシス—生命の有機構成」⁴¹⁾においてオートポイエーシス概念を提起した。それは今日、社会学、認知科学、脳、神経生理学、精神医学など様々な分野に影響を与えている。⁴²⁾河本英夫はそれを第二世代の自己組織化論のさらなる発展であるとして「第三世代のシステム理論」と呼んだ。

このオートポイエーシス概念の特徴はまず第一にこれまでのシステム理論が「開放性」つまり環境との入力—出力関係の存在を前提に構想されていたのに対して、入力も出力もない「閉鎖性」を特徴とする。しかしこのことはシステムに外部とのエネルギー代謝も物質代謝もないということを言っているのではない。たとえば神経システムは、絶えず環境からの刺激を受容している。しかし神経システムの作動において行われているのは、神経システムの構成素(component)⁴³⁾を、産出、再産出することだけであり、システムはそれ固有の同一性を保持するようにその作動を反復するだけである。神経システムの側から見れば、このシステムの作動をひきおこす要因が、観察者から見て内的なものであろうと外的なものであろうと神経システムはこれらを区別しない。よって神経システムからみれば、環境との関係で区画されるような境界はなく、その境界のもとに想定されているインプットもアウトプットもないことになる。つまり神経システムは構成素の産出においては一貫した閉鎖系をなし、同時に環境との関係においては、内部も外部もない

というかたちで開かれているのである。開放系システムでは、システムの境界は観察者によって規定され、空間的に区切られている。それに対してオートポイエーシス・システムでは、システムは産出関係を通じて自己の境界をみずから画定する。そこでは外部の観察者によって「観察されるシステム」(observed system)から「観察するシステム」(observing system)への視点の移動が行われているのである。

この視点の移動は、システム理論と個人内的な心理学理論との接続を容易にする。精神科医のリュック・チオンピ(Luc Ciompi)は「心的発展の全体は、マトゥラーナ・ヴァレラの言う意味での自己組織化過程として理解することができる」⁴⁴⁾と言う。また家族療法家のサイモン(F.B.Simon)は、オートポイエーシスは「自律性ならびに内的構造に規定されたふるまいとみなされる。それゆえ環境の変化は、そのような自律的システムの中で何が生ずるかをけっして規定できない。それはたえずその内的構造に適応するようにふるまう。そこから次のことが演繹される。すなわち認識と認識されるものの間で、模写—対象関係は決して与えられない。外的現実性は内的現実性を決定することはできない。それぞれの生きたシステムは、それが何をいかに認識するか、いかなる現実性を構成するかを自ら規定するのである。」⁴⁵⁾と言う。心的システムをオートポイエーシスとしてとらえるとき、それは認知心理学あるいは構成主義的心理学と接続可能である。

しかしオートポイエーシス理論を心理システムの次元でとらえるだけでは、教育の場合十分ではない。教育という出来事が教師と生徒の相互関係、すなわち社会システムにおいて生じる以上、オートポイエーシス理論は社会システムの次元でとらえられるものでなければならない。ところがこの問題についてマトゥラーナとヴァレラの間には見解の対立がある。ヴァレラはオートポイエーシスの概念規定は社会システムには適用できないと主張する。なぜなら要素システムとしての人間が集まって高次のオートポイエーシス・システムである社会が成立したと仮定しても、要素システムは独自のオートポイエーシス・システムとして自己の要素を産出するのだから、高次のオートポイエーシス・システムによって産出されたりはしないからである。⁴⁶⁾またオートポイエーシスはシステムと構成素を「産出関係」によって規定しているが、社会と個人の間にはそのような産出関係は存在しない。⁴⁷⁾そこでヴァレラはオートポイエーシス概念は産出関係をともなう細胞、神経、免疫システムにのみ限定し、それ以外のシステムを含めた特徴としてオートノミー

(オート＝自己、ノモス＝法則) 概念を提唱する。⁴⁸⁾

一方マトゥラーナはあくまで社会システムへの適用に固執するが、要素システムが集まって高次システムを作った場合、要素システムのオートポイエーシスつまりその自律性そのものは喪失せざるをえない。それでは「要素システムが高次システムに一方的に従属することにな」⁴⁹⁾ってしまうのである。このことは彼らの共著論文「オートポイエーシスー生命の有機構成ー」(1973)の序文を書いたスタフォード・ピアによっても洞察されている。「より大きなシステムは、そこに組み込まれたシステムがあたかも消滅したかのように一完全なオートポイエーシスではないかのようにとらえる。…うめこまれたシステムのオートポイエーシスは、特殊な拘束、つまりオートポイエーシスそのものを否定しようとするふるまいに反応しなければならない」⁵⁰⁾のである。

オートポイエーシス概念は何よりもシステムの自律性(オートノミー)を強調するものであった。ところがそれを社会システムに適用することによって、再び外部からの秩序化の問題が浮上してくる。教育の文脈において考えると、たしかにシステム理論は教育における関係性をとらえる上で、そこに潜む円環性やパラドックス性、そして自己組織性などの新たな視点を与えてくれるように思われる。しかしそれは教育の管理と統制に寄与するものとしてしかとらえられないのだろうか。実はそのようなオートポイエーシス概念の矛盾を解決する試みを行ったのがドイツの社会学者、N. ルーマンである。ルーマンは社会システムの要素に「個人」ではなく、「コミュニケーション」をすえることで、オートポイエーシスの定義を社会システムに当てはめることを可能にした。ルーマンによれば、心理システムも社会システムも、共に自己準拠(Selbstreferenz)的に閉じたオートポイエーシスのシステムである。どちらもそれ固有の構成素を、それ固有の操作をともなった再帰的ネットワークにおいてのみ生み出し、再生産する。その構成素は心理システムにおいては「思考」であり、社会システムにおいては「コミュニケーション」である。⁵¹⁾つまり心理システムと社会システム(教育システム)は二つの次元を異にするシステムとして把握されるのである。しかしそのときシステム理論は「制御」や「統制」の理論を越えてさらに「制御不能」の理論となる。教育が心理システムに意図的な変容を企てようとする試みであるなら、オートポイエーシス理論においてそれはまさにありそうにもない出来事だからである。ではそのとき教育システムはいかにして可能となるのか、残念ながらルーマンの教育システム理論の詳細については後の機会に譲らざるをえない。

結びにかえて

では最後に、教育学の分野でオートポイエーシス理論はどのように適用されうるのか、その一例を紹介したい。その一つは、サワダ(D.Sawada)とY.PothierのEducational Researchに関する研究にみる事ができる。⁵²⁾サワダらは、「学級風土」(classroom climate)をオートポイエーシス・システムとしてとらえる。「学級風土」は生徒の自発性によって作られ、生徒の自発性は学級風土によって維持され、高められる。このとき「学級風土は構成要素間の関係のネットワークに対応しうるし、構成要素の生産プロセスは自発性に対応しうる」⁵³⁾のである。その意味で学級とはそれを構成する要素のオートポイエーシスを境界づけ、高めるようなオートポイエーシス的社会システムであると言える。またオートポイエーシスの個々人の関係は、それ自身が構成する社会システムのルールの実現でもある。そのとき重要なのは、「境界条件は自発性として実現されるとき、更新され、高められるが、逆に境界条件は自発的秩序の尊重なしに押し付けられるとき、破壊される」⁵⁴⁾ということである。つまり教師が権力的にルールや規律をクラスに押し付けようとする場合、あるいは生徒の望むようにする自由をクラス全体に許す場合、「どちらのクラスにおいても、その学級風土はメンバーの自発性を規定したり、高めたりするネットワークとしては生み出されない」⁵⁵⁾というのである。そこでおそらく問題になるのは、教師が学級のオートポイエーシスを高めるためには、学級システムの構造にどのようにアプローチするかということであろう。しかしそれについて彼らの言及はない。サワダらのここでの研究課題は、そのような仮説をエスノメソドロジ的会話分析の手法によって実証することに限られているからである。

彼らのオートポイエーシス理論のとらえかたは、システムの自律性の肯定的側面のみが強調されている。だが逆に次のように言うこともできる。教師たちから、「生徒たちに指導が入らない」とか、「生徒たちが何を考えているのかわからない」と言った声を聞くとき、それは学級というオートポイエーシス・システムにとっての「環境」でしかない教師の苦悩だと言える。つまり生徒間コミュニケーションは一つの閉じたシステムを形成し、そのとき教師の声はまさに「ノイズ」にすぎない。教師の注意は、生徒間におけるコミュニケーション・システム内部でまったく異なったものとして構成されてしまうのである。その意味で、教師が「いじめ一掃」を呼びか

けクラス決議を行わせたとしても、その決議が学級システムの自律的なコミュニケーションから生まれたものでなければ、その指導は結局失敗に終わるであろう。いずれにせよ教師は一人一人の生徒に関わると同時に生徒たちが織りなすコミュニケーション・システムに関わらなければならない。そのとき教師の指導性は学級システムの自律性に依拠し、その内部に共鳴を作り出しえるかどうかにかかっているのである。

(指導教官 吉澤昇教授)

注

- 1) 近藤邦夫 254-258頁
- 2) 同上, 258頁
- 3) H.ガントリップ著, 小此木啓吾, 柏瀬宏隆訳『対象関係論の展開』誠信書房 1981年 ガントリップの「システム自我」という概念は、フロイト理論が「主体の脱中心化」につながる理論であること、そしてその意味でのシステム理論との親近性を表現している。
- 4) 近藤, 前掲書 259頁
- 5) H.ガントリップ, 前掲書 279頁 (訳者解説)
- 6) 近藤, 前掲書 240頁
- 7) 家族療法は人脈的にも対人関係論と密接に関わっている。アメリカの家族療法の拠点であるMRIの創立者ジャクソンは精神科医の訓練を、ネオフロイト派のフロム・ライヒマンやサリバンがいた私立病院チェスナット・ロッジで受けている。そしてその後ジャクソンはパロアルトでベイトソンとともにコミュニケーション研究を始めるのである。よって個人から関係へ、そして家族療法へという流れは、具体的にはフロイト・ネオフロイト派対人関係論・家族システム論の系譜としてみる事ができよう。
- 8) 近藤, 前掲書 262-263頁
- 9) 同上, 264頁
- 10) 同上, 262-282頁
- 11) 同上, 287頁
- 12) 同上, 265頁
- 13) 佐藤学は近藤との討論で、「ミスマッチはミスマッチで大切にできる教室や学校のあり方」の探求も必要であることを指摘している。(汐見稔幸他編『学校の再生をめざして2教室の改革』東京大学出版会1992年 95-96頁)
- 14) 近藤, 前掲書 268頁
- 15) マゴロウ・マルヤマ「セカンド・サイバネティクス」『現代思想』1984年12月号参照
- 16) 近藤前掲書 287-288頁
- 17) リン・ホフマン著, 亀口憲治訳『システムと進化—家族療法の基礎理論』朝日出版社 1986年 19頁
- 18) フォン・ベルタランフィ著, 長野敬, 太田邦昌訳『一般システム理論』みすず書房 1973年 参照
- 19) リン・ホフマン, 前掲書 20頁
- 20) 同上, 22頁
- 21) 同上, 22頁
- 22) 同上, 484頁
- 23) マゴロウ・マルヤマ, 前掲論文
- 24) 例えば個体発生の場合、個体が遺伝子のわずかな情報にもかかわらず多様に成長していくのは、それが組織間の相互作用という逸脱増幅的なプロセスを経るからだと言えよう。
- 25) リン・ホフマン, 前掲書 85頁
- 26) 同上, 89頁
- 27) 同上, 97頁
- 28) 十島雍蔵「フィードフォワードとセカンドサイバネティクス」『現代のエスプリ』1991年6月号 71頁
- 29) マゴロウ・マルヤマ, 前掲論文 214頁
- 30) 同上, 213頁
- 31) ミニューチンを中心に発展したグループの理論。家族システムに療養家が溶け込む過程を重視したうえで、夫婦、親子といったサブシステムの境界に働きかけ、構造変革をうながす。その際、親子の共生的関係を解体し、適切な連合関係を築くことをめざす。亀口も「片親家族などの非通例的な家族関係がむしろ優勢となりつつある現代の家族の実態にそぐわない面もあるかもしれない」と指摘している。(亀口憲治『家族システムの心理学』北大路書房 1992年 参照)
- 32) リン・ホフマン, 前掲書 370頁
- 33) 同上, 475頁
- 34) Fishによれば80年代半ばに家族療法のシステム・パラダイムに対するフェミニズムの立場からの批判が相次いで行われている。(Fish, V., Journal of Marital and Family Therapy, 1990, Vol.16, No.1, p.21)
- 35) ミシェル・フーコー著, 田村淑訳『狂気の歴史』新潮社 1975年 参照
またシステム理論モデルによって「どのようにして患者はつくりだされるか」を解明しようとする試みとしてシェフの研究がある。(T.J.シェフ著, 市川孝一, 真田孝昭訳『狂気の烙印—精神病の社会学』誠信書房 1979年 参照)
- 36) プリコジン, スタンジュール著, 伏見, 松枝訳『混沌からの秩序』みすず書房 1987年
- 37) 河本英夫「第三世代システム: オートポイエシス4」『現代思想』1993年9月号 39頁
- 38) リン・ホフマン, 前掲書 230頁
- 39) 河本英夫『オートポイエシス 第三世代のシステム』青土社 1995年 84頁
- 40) F.J.ヴァレラ著, 長尾力訳「オートノミーとオートポイエシス」『現代思想』1993年 9月号 64頁
- 41) H.R.マトゥラーナ, F.J.ヴァレラ著, 河本英夫訳『オートポイエシス—生命システムとは何か—』国文社 1991年 所収
- 42) 河本, 前掲書 (1995) 8頁
オートポイエシス論の理論家として河本は, N. ルーマン(社会学), ウィノグラード/フローレンス(認知科学), G・ロート(脳, 神経生理学), G・トイブナー(法社会学), ルック・チオンビ, ブランケンブルク(精神医学)の名をあげている。
- 43) システムと構成素は, 部分-全体関係にも要素-複合関係にもない。それを想起させないために, 河本はcomponentに「構成要素」ではなく「構成素」という訳語を当てている。(同上, 181頁参照)
- 44) チオンビ著, 井上有史, 深尾憲二郎訳「心的構造の発生—心的領域におけるオートポイエシス」『現代思想』1993年9月号 138頁
- 45) Simon, Fritz B. (Hrsg.), Lebende Systeme, Wirklichkeitskonstruktion in der Systemischen Therapie, Springer-Verlag 1988, S.8
- 46) 河本, 前掲書 (1995) 249頁
- 47) マトゥラーナ, ヴァレラ, 前掲訳書 訳者解説 284頁
- 48) ヴァレラによれば, 「オートポイエシスは物理的空間内に生きている有機体が単位体としての特徴をもつという点にかかわっており, オートノミーはその他の相互作用空間にも適用可能な一般現象にかかわっている」。またオートノミーが「文字どおり意味するところは, 自己-法則であり, それは「生成, 内的規則およびそれ自体のアイデンティティの維持」といったいわ

ば内部からの規定を表す」。(F.J.ヴァレラ著, 長尾力訳「オートノミーとオートポイエーシス」『現代思想』1993年9月号 64-72頁)

- 49) 河本, 前掲書 249頁
- 50) マトゥラーナ, ヴァレラ前掲訳書 59頁
- 51) 詳しくは Luhmann, N., Soziologische Aufklärung 6, Westdeutscher Verlag, 1995 所収の論文参照。
- 52) Swada, D./Pothier, Y., Designs for Emerging Oder in Qualitative Research:An Alternatie Perspective, Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association, 1988
- 53) ibid., p.7
- 54) ibid., p.7
- 55) ibid., p.7